



文化財愛護
シンボルマーク

細曾1号墳

昭和62年3月

松江市教育委員会

凡 例

1. 本書は昭和60年度に松江市教育委員会が、浅野定一氏の依託を受けて実施した細曾1号墳の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、昭和60年5月13日から同年7月15日までの内、計36日間を要し、それにかかる経費は205万円を費した。
3. 発掘調査の組織は、次のとおりである。

委託者 浅野定一

受託者 松江市 松江市長 中村芳二郎

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 荘

事務局 野津久夫（社会教育課課長） 岡崎雄二郎（文化係長）

中尾秀信（文化係主事）

調査員 中尾秀信 今岡一三（嘱託）

調査参加者 水野真吾 福田邦光 林 義徳 小柴文夫 野津文太郎

周谷重夫 白石 勇 福田忠男 山本富寿 井上 芳

荒川敏雄 品川 愛 周谷玉枝 山本タカ子 福田ハツエ

小柴廣子 宮本満江 荒川治江

4. 発掘調査に際しては真和商事有限会社から多大な協力を得た。
5. 出土遺物については、山本清（島根大学名誉教授）、田中義昭（島根大学教授）、松本岩雄（県文化課）の諸氏から有益なる指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。
6. 出土遺物および図面の整理は、今岡一三と小村明子、松浦徳子が行った。
7. 本書の執筆、編集は、今岡一三が行った。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	9
1. 1号墳について	9
(1) 墳丘の構造	9
(2) 主体部	9
(3) 出土遺物	10
(4) 古墳に伴わない遺物	16
IV 小 結	20

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である **柱**、**すなわち** **竿** と **様** の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

I 調査に至る経緯

本古墳群は、松江市坂本町字細曾 825 番地の国道 431 号線より北に約 700 m の北山山地山麓に位置するが、昭和 60 年 5 月に浅野農園の造成工事が計画され、本古墳群を含む山林尾根を約 1,400 m² にわたり削平することになり、事前の発掘調査が必要となった。

調査に先立つ分布調査では計 4 基の古墳が確認されたが、当教育委員会の調査体制上一度に 4 基もの古墳の調査に対応出来ない状況であったので、昭和 60 年度に最高所の 1 号墳のみ調査を行い、昭和 61 年度に残りの 3 基を調査する事で合意した。しかし、昭和 61 年度に入り、浅野定一氏から農園の造成工事の変更計画が出され、1 号墳のみ調査を行ない残り 3 基については現状保存する事になった。



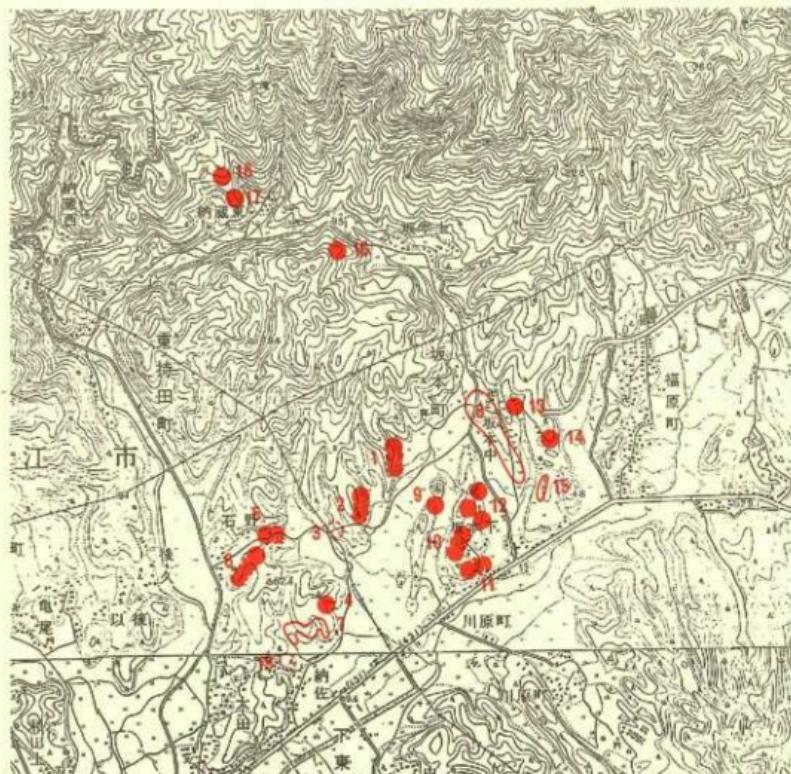
第 1 図 調査位置図

II 位置と歴史的環境

本古墳群は、松江市の北東部の南北にのびる低丘陵尾根上に位置しており、所在地は松江市坂本町字細曾 825 番地である。

古墳群は一辺 8 ~ 18 m の方墳 2 基と径 10 cm の円墳 2 基、計 4 基で成り立っている。このうち 2 号墳は約半分割平を受けていたが、土器等を表探する事は出来なかった。

本古墳群の南側丘陵には前方後方墳 1 基、方墳 2 基からなる『薄井原古墳群』がある。1 号墳は全長 50 m、高さ 4.5 m からなる前方後方墳で、埋葬主体は 2 基の横穴式石室からなり、この地域の中心的な古墳群であったものと思われる。またこれより、北東部の南北



第 2 図 周辺の遺跡分布図

に延びる低丘陵の緩斜面に、須恵器、土師器などが散布している『坂本中遺跡』があり、これは広範囲に及ぶ集落遺跡と考えられ、古墳時代後期から奈良、平安時代まで続いていたものと推定されている。

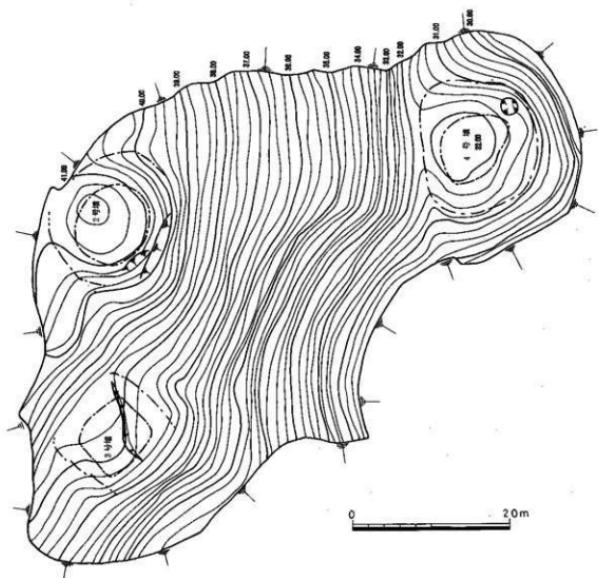
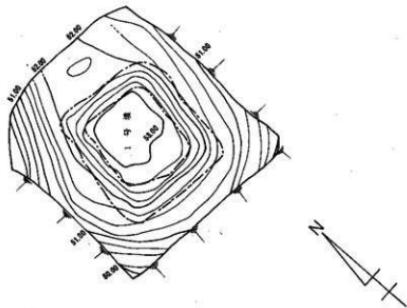
本古墳群の存在する山麓の北側丘陵部に一辺 8 m、高さ 1 m の『小川善之助宅裏山古墳』があり、この古墳から北西側の谷間に異形の石棺式石室を持つ『古妙見古墳』が存在している。その北側には『坊床寺跡』があり、軒丸、軒平瓦が表採されている。

以上のように、本古墳群の周辺には調査例が少ない事もあり、縄文、弥生時代の遺跡の存否については今のところ不明確である。

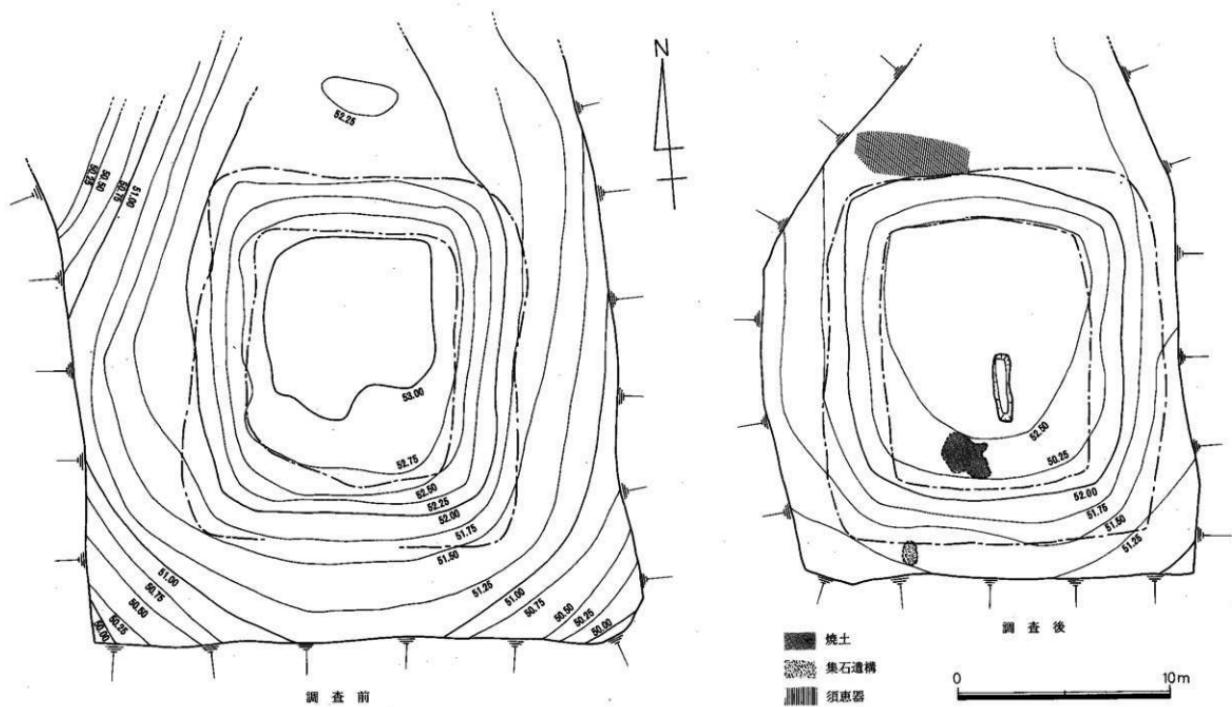
古墳時代に入ると『道仙古墳群』のような前期古墳や『薄井原古墳群』のように、県内最大級の古墳の一つに数えられるものが出現し、また規模は小さいながらも石棺式石室などの内部主体が立派なものも多数あり、この地域での古墳中心地帯の様相を示している感がある。この事から、当地域では古墳時代において政治的、経済的基盤が確立し、奈良平安時代以降も主要な地域であった事が推測される。

第 1 表 周辺の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 構	・ 遺 物	
1	細曾古墳群	坂本町字細曾 825	1号墳 2号墳 3号墳 4号墳	17 × 15 m 8 × 7.5 m 10 m 10 m	高さ 1.6 m 方墳 方墳 円墳 } 未調査 円墳
2	古 墓 群			方墳 4基	
3	常熊古墳	東持田町常熊		横穴式石室を持つ円墳、消滅	
4	古 墓			円墳	
5	古 墓 群			方墳 2基	
6	石野古墳群	東持田町石野		方墳 5基	
7	納佐池遺跡			須恵器	
8	坂本中遺跡	坂本町		須恵器、土師器	
9	中久跡古墳	坂本町		前方後方墳	
10	香々廻古墳群	坂本町香々廻		方墳 3基	
11	薄井原古墳群	坂本町薄井原		前方後方墳 1、方墳 2基	
12	小林古墳群	坂本町小林		方墳 3基	
13	坂本館跡	坂本町唐人原		土器	
14	古 墓			方墳	
15	散布池			須恵器	
16	小川善之助宅裏山古墳	坂本町別所	8 × 8 m	高さ 1 m 方墳	
17	古妙見古墳	" "		異形石棺式石室	
18	坊床寺跡	" "		須恵器、瓦、古錢	
19	道仙古墳群	東持田町道仙		方墳 4基	



第3図 細曾古墳群位置関係図



第4図 1号墳平面図

III 調査の概要

細曾古墳群は、標高50m前後の南北に延びた低丘陵尾根上に立地している。全部で4基を数えるが、この中で一番高所に位置している1号墳のみ今回調査を行った。

1. 1号墳について

標高約50m前後の丘陵尾根上に位置し、水田からの比高は約20~25mを測る。

墳丘の南、東、西側は、調査に入る以前に重機によって削られて崖になっており、正確な地形を留めていなかった。

(1) 墳丘の構造

調査前の測量によれば、南北17m、東西15m、高さ約1.6mを測り、墳頂平坦面で南北12m、東西9mの規模をもつ方墳であった。

調査の結果、南北17.5m、東西15.5m、墳頂平坦面で南北12.5m、東西9.5m、高1.2mの比較的大きな規模の方墳であり、自然地形を利用し、それを切削加工して墳丘基盤を築いていた。

封土は、墳丘基盤を造り出す際に削り取った土を盛ったものと考えられ、地山と同じ赤黄色土が墳頂部で約40cm、墳裾で約25~30cmほど施されていた。この封土の下に旧表土があり地山へと続く。外部施設としての埴輪、葺石や周溝などは検出できなかったが、南側墳裾において挙大の石が径約1m前後の範囲で不定形に配置されていた。これは表土中より検出したものであり、古墳建築時に関係するものではないと考えられ、後世において何らかの目的をもって置かれたものと思われる。また、墳頂部南側の旧表土上に径約2mの範囲で焼土が認められ注意をひいた。

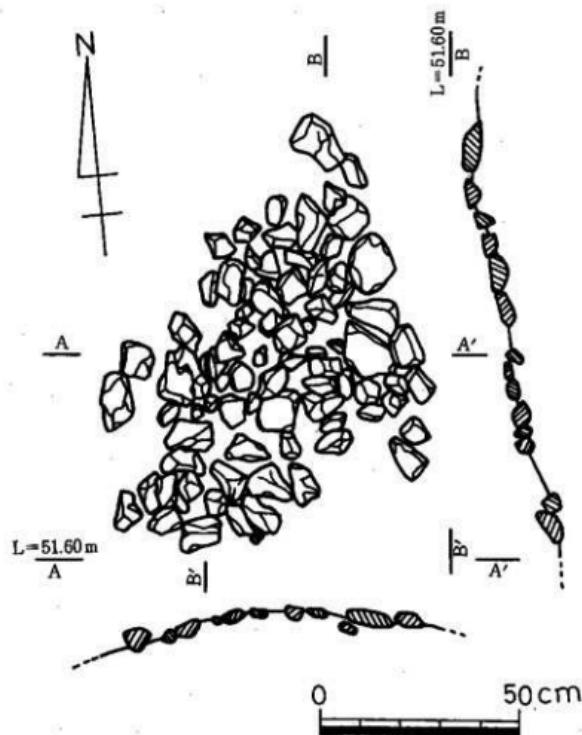
(2) 主体部

墳頂部の盛土を約40cm掘り下げたところ、旧表土と思われる暗黄褐色土を検出し、この旧表土面を精査した結果、墳頂のやや南寄りに主軸方向をN-2°-Eに向けた土壙が1基穿たれていた。土壙の平面形は大略隅丸長方形を呈しており、長辺3m、短辺0.8m、深さ0.3mを測る。土壙床面には何も敷かれず、直接地山に土壙を穿ち、その中に木棺を直葬したものである。プラン検出時の土壙中央の木棺痕跡部分は長辺2.7m、短辺0.4m、深さ0.3mの長方形のものであるが、北端では「コ」の字状になっていた。土壙床面の断面が「U」字形を呈している事から割竹形木棺を直葬したものと判断されるが、前述したように土壙北端が「コ」の字状になっていることから、組み合せ式木棺の可能性も考えら

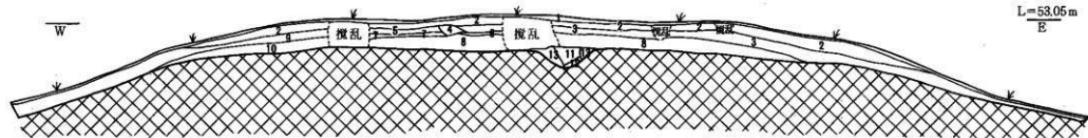
れる。棺内の中より北側で菅玉21本、勾玉2個、刀子1本が検出されている。また、土壙北側が南側よりわずかに幅広く造られ、床面の高さも北側から南側にかけて傾斜している事や副葬品の出土位置などから、被葬者の頭位は北向きであったと推定される。棺内遺物の外に主体部上面、土壙南端側から土師器の高環形土器3個体が、倒れているものと逆立ちの状態のものが出土しており、本来3個ともふせた状態で埋置されていたものと考えられる。

(3) 出土遺物

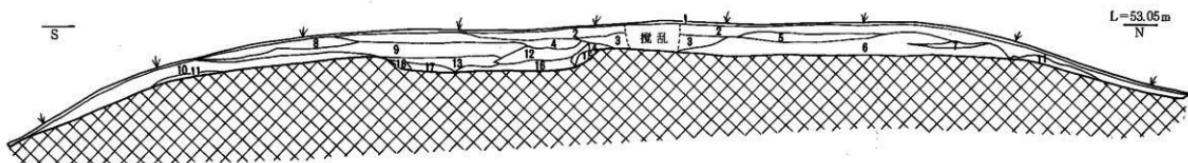
棺内から刀子、玉類、棺外遺物として主体部直上より土師器の高環形土器が出土している。



第5図 集石造構平面図



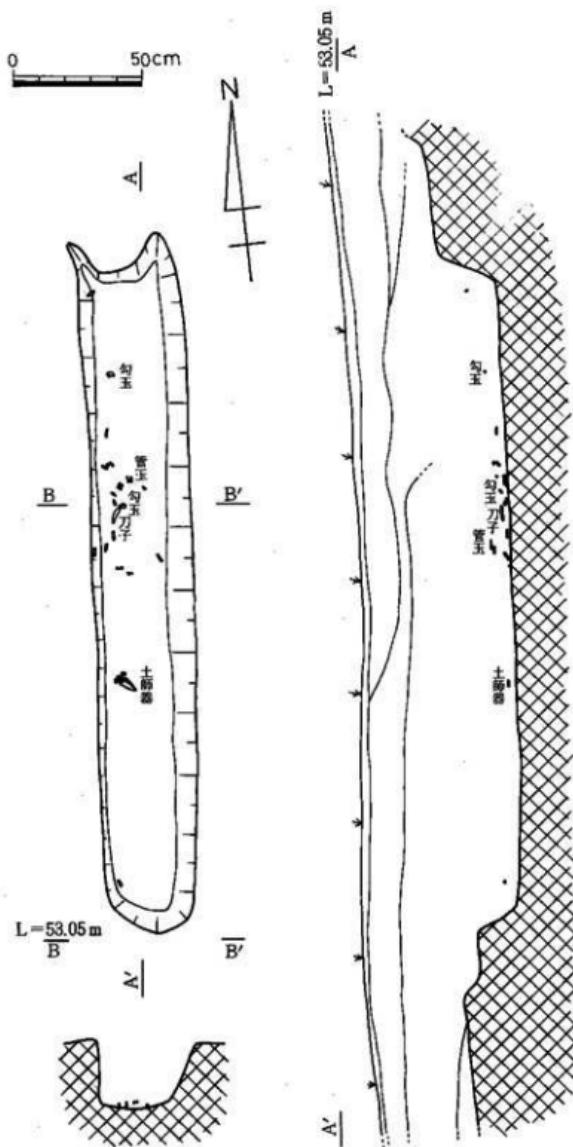
- | | | |
|------------|---------|-----------------------|
| 1 表土 | 6 褐色土 | 11 黒色土 |
| 2 赤黄褐色土 | 7 明褐色土 | 12 暗褐色土 |
| 3 明黃褐色土 | 8 明赤褐色土 | 13 明褐色粘質土(赤色、白色ブロック混) |
| 4 淡黄赤褐色粘質土 | 9 5と同じ | |
| 5 淡黄褐色土 | 10 暗黄色土 | |



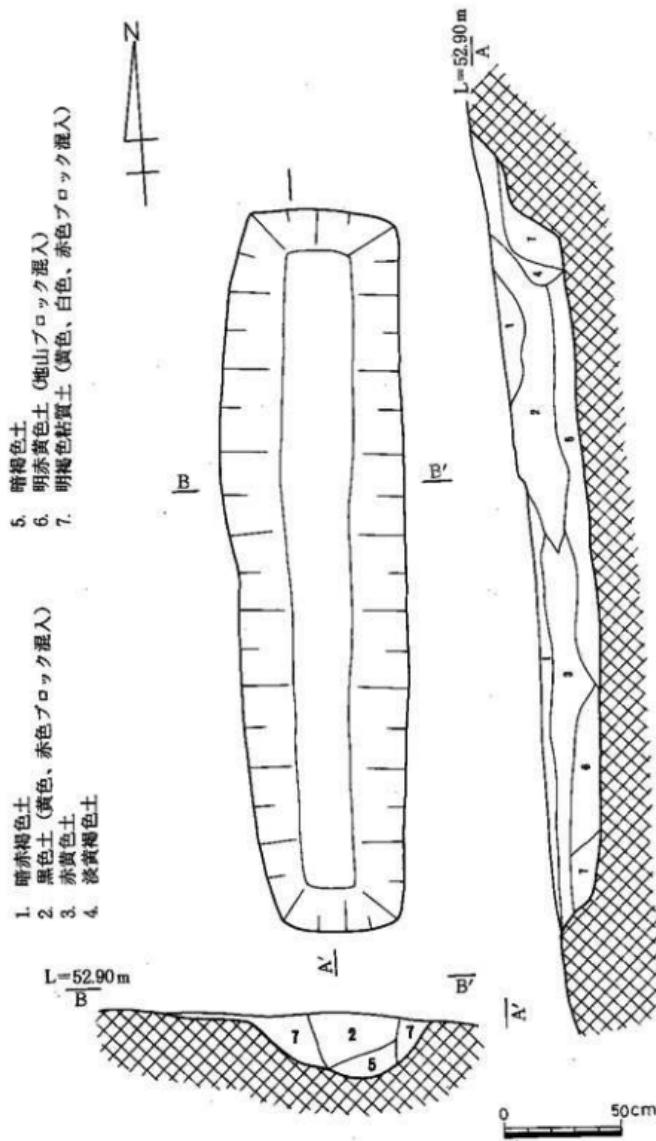
- | | | |
|-------------------|--------------------|-------------------|
| 1 表土 | 7 茶褐色粘質土(地山ブロック混) | 13 赤黄色土 |
| 2 赤黄色粘質土(地山ブロック混) | 8 赤褐色粘質土(") | 14 淡黄褐色土(地山ブロック混) |
| 3 明黃褐色土(") | 9 明褐色土 | 15 4と同じ(振り方の土) |
| 4 明赤褐色粘質土(") | 10 暗赤褐色土 | 16 暗褐色土 |
| 5 黄褐色土(") | 11 暗黄褐色土(旧表土) | 17 明赤黄色土 |
| 6 褐色土(") | 12 黒色土(黄色、赤色ブロック混) | 18 15と同じ |

第6図 墳丘断面図

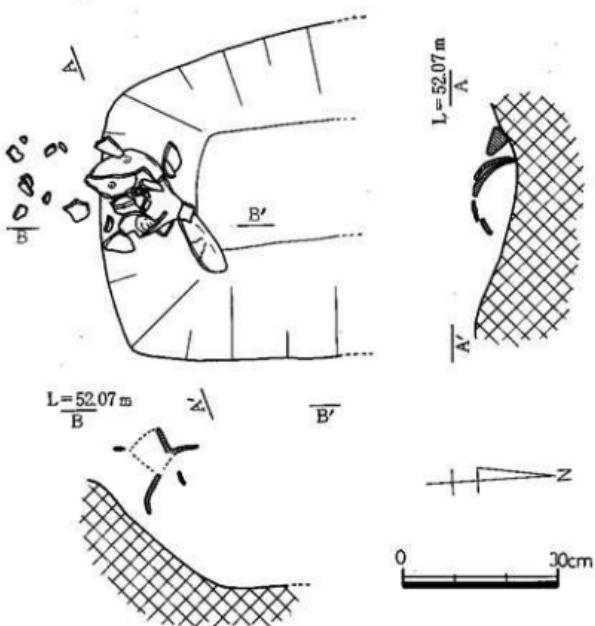




第7図 主体部木棺痕跡部分及び遺物出土状況図



第8図 主体部実測図



第9図 土師器出土状況図

土 師 器

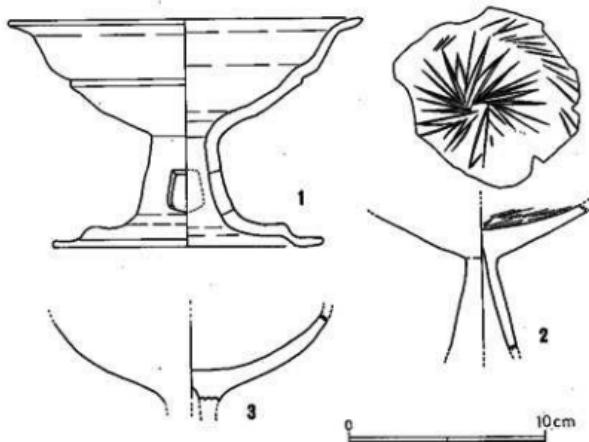
1は坏部と脚部に段を持つ高环形器台である。

坏底部からゆるやかに内彎しながらび、幅3mmほどの垂直の段を作ったのち外反しながら口縁部に至る。脚部も垂直にのびながら段を作り端部に至る。

筒部に一方の台形の透しを有す。坏部内面ハケ目後ヘラ磨き、坏部外面ヨコナデ、脚部ヨコナデ、脚部内面ヘラ削りが施されている。

2は坏底部と脚部の一部分しか残存しておらず、坏底部内面に方射状にのびる暗文風のヘラ磨きを施すものである。外面の調整は不明であるが、一部に赤色顔料が付着していた。

3は坏底部のみ残存しており、これも保存状態が悪かったが、赤色顔料が付着しているのが認められた。



第10図 土師器実測図

管 玉

緑色凝灰岩製のものであり、合計21本出土しているが、残存状態が悪く形を留めているものは6本で、他は検出位置で細片となっていた。長さは3.65cm～2.0cm、径は0.5cm～0.32cmの細長いタイプのものである。6を除いて色調は黄緑色で白色のシマ模様がある。

穿孔は両面から行われており、このように穿孔が両面から行われている管玉の県内の出土例として、^{註1}松江市客山古墳、^{註2}鹿島町奥才古墳群、^{註3}安来市造山三号墳、^{註4}出雲市山地古墳などがある。

勾 玉

赤瑪瑙製のものであり1は長さ2.6cm、厚さ0.75cm、孔径3.5mm～1mmである。鈍い光沢をもち、穿孔は一方向のみから行われている。2は長さ2.2cm、厚さ0.7cm、孔径2.5mm～1.5mmで、1と同じく片面穿孔である。

刀 子

主体部床面近くから出土しており、ほぼ完存している。

全長7.6cm、元幅1.25cm、茎の長さ2.1cmを測り、木質の付着がみられる。

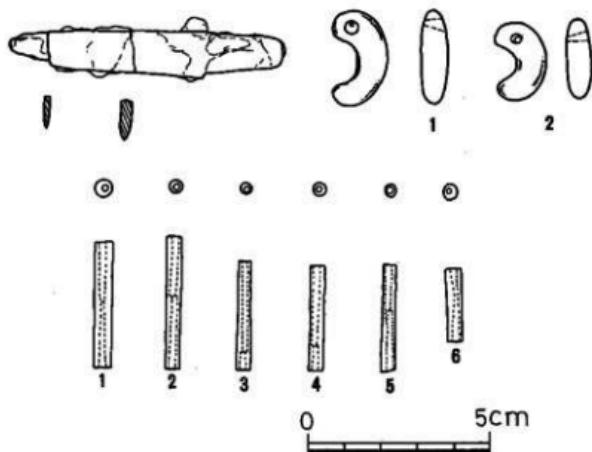
(4) 古墳に伴わない遺物

北西側墳裾部分の表土下から糸切り痕跡のある須恵器が多量に出土しており、実測可能であったものは13を数える。（第12図、第3表）

すべて环身であり、高台付きのものと無いものがある。これらの須恵器はおおまか高広
遺跡のIV期～V期のものに該当するものと思われ、本古墳築造時には関係していない。

こうした古墳の時期と違う新しい時期の土器を墳棺などから出土する例は、松江市竹矢
町の中竹矢後1号墳や鹿島町奥才古墳群などにも見られる。

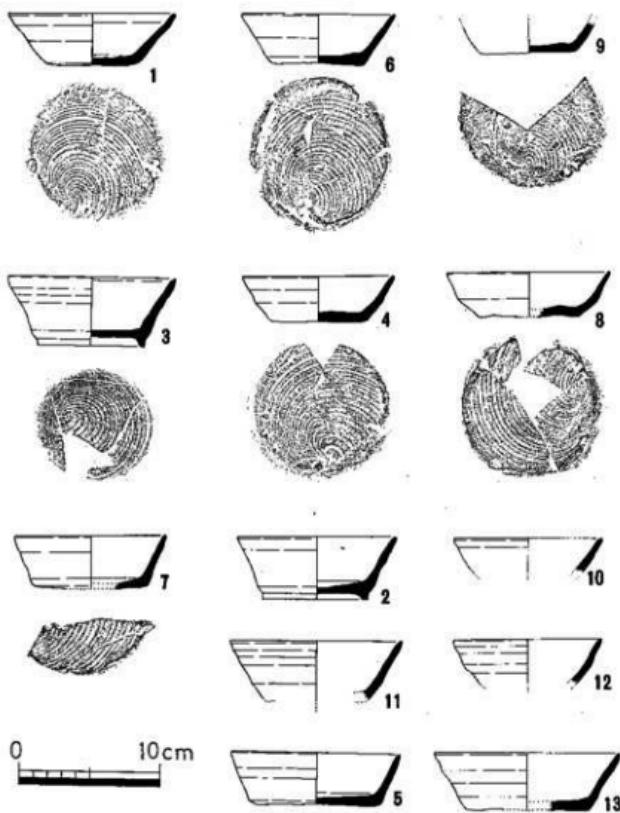
このように、古墳の墳棺などから新しい段階の土器が出土すると云う事は、後世何度か
墳墓祭祀のようなものが執り行われたものであろうか。また別の意味を持っているものな
のか、今後の類例を持って検討する必要があろう。



第11図 主体部内出土遺物実測図

第2表 管玉計測表

実測図 番号	種類	計測値 (mm)			色調	材質	備考
		長さ	外径	孔径			
1	管玉	3.5	0.5~0.48	2.0	黄緑色	緑色凝灰岩製	シマ模様あり
2	"	3.65	0.4	1.8	"	"	"
3	"	2.95	0.32	2.0	"	"	"
4	"	2.9	0.4	1.5	"	"	"
5	"	2.95	0.35	2.0	"	"	"
6	"	2.0	0.4	1.8	淡緑色	"	



第12図 古墳に伴わない遺物実測図

第3表 遺構外出土須恵器観察表

種類	回数 番号	法 番	形態の特徴	手 法の特徴	備 考
坏身	1	口径 12.0cm 器高 3.8cm	口縁部は内側してのびた後、外反し、さらに内側して端部に至る。底部はやや深く平らに近い。	底部内面は多方向の仕上げナデが施され、底部外面は回転糸切り。その他回転ナデ。	胎土 密 焼成 や良好 色調 内外面とも淡灰色
同上	2	口径 11.5cm 器高 4.5cm	口縁部は外反した後、内側して端部に至る。端部は丸い。底部は深く、平らに近い。高台はハリックによる。	底部内面、外面とも剥落が激しく調整不明。その他回転ナデ。	胎土 密 焼成 良好 色調 内面、外面とも青灰色
同上	3	口径 12.0cm 器高 4.95cm	口縁部はやや内側してのび端部に至る。端部は丸い。底部は深く平らである。高台はハリックによる。	底部内面多方向の仕上げナデ、外面は回転糸切りが施されている。その他、回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内面黄灰色、外面青灰色
同上	4	口径 11.0cm 器高 3.3cm	口縁部は外反してのびた後、内側して端部に至る。底部はやや深く平らである。	底部内面、静止ナデ 底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内外面とも暗灰色
同上	5	口径 12.2cm 器高 3.8cm	口縁部はやや外傾してのび、端部は丸い。底部は深く平らである。	底部内面、多方向の仕上げナデ 底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 やや粗 焼成 良好 色調 内面、外面とも暗灰色
同上	6	口径 11.2cm 器高 3.6cm	口縁部は外傾してのび、端部はやや丸い。底部は深く平らである。	底部内面、静止ナデ 底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内面、外面とも灰色
同上	7	口径 11.0cm 残存高 3.8cm	口縁部は外傾してのび、端部は丸い。	底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 密、0.1~1mmまでの白色砂粒を含む 焼成 や良好 色調 内外面とも淡青灰色
同上	8	口径 11.8cm 残存高 3.2cm	口縁部は内側してのびた後、外反してさらに内側して端部に至る。底部は凹凸している。	底部内面、多方向の仕上げナデ 底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 やや密、0.1~3mmまでの砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面、外面とも灰色
同上	9	残存高 1.9cm	底部は平らである。	底部内面、静止ナデ 底部外面、回転糸切り その他、回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内面、青灰色 外面、暗灰色
同上	10	口径 10.8cm	口縁部は外傾してのび、内側して端部に至る。	回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内面、外面とも灰色
同上	11	口径 12.4cm 残存高 4.3cm	口縁部は外傾してのびる。	回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内外面とも黄灰色
同上	12	口径 10.8cm 残存高 3.3cm	口縁部は外反した後内側して端部に至る。	回転ナデ	胎土 密 焼成 良好 色調 内面、外面とも青灰色
同上	13	口径 13.6cm 器高 4.1cm	口縁部は内側してのび端部は丸い。底部は深く、平らである。	底部内面 静止ナデ 底部外面 回転糸切り その他 回転ナデ	胎土 密、0.1~1mmまでの白色砂粒を含む 焼成 良好 色調 内面暗黄灰色、外面暗灰色

IV 小 結

今回の調査は1号墳のみの調査であったが、以下調査で明らかとなった事を簡単に整理しまとめとする。

墳丘は南北17.5m、東西15.5m、墳頂平坦面で南北12.5m、東西9.5mの長方形を呈し、高さ1.2mの比較的大きな方墳であった。

墳丘の築造方法は、墳頂部の旧表土が墳裾部分で削り取られている事から見て、丘陵の自然地形をそのまま利用し、地山の削り出しを主に少量の盛土を施すことによって墳丘の整形、調整を行い、墳丘基盤を築成したものである。墳頂平坦面が広く造られている為に、当初複数の埋葬施設があるものと予想されたが、調査の結果確認できた主体部は1基のみであった。

主体部は墳丘中央部より南側の所に位置しており、墳丘規模に比べてやや小さく感じられるものであった。旧表土面から掘り込まれたもので、隅丸長方形の素掘りの土壙に木棺を据え、詰土によりこれを固定したものと考えられる。この主体部上掘方南端側から赤色顔料を塗布した土師器の高坏2個体と高坏形器台1個体が出土しており、この様に主体部上に土器を供獻している例は、安来市の鍵尾土壤墓群^{註8}、安来市小谷土壤墓群など弥生終末期～古墳時代前期の土壤墓群や、鳥取市桂見古墳などの前期古墳、松江市客山古墳群^{註9}、安来市大坪古墳群などの中古墳の一部に見る事ができ、この事は埋葬終了時に祭儀が執り行われた行為を示すものと考えられている。それらの遺跡の中で、意図的に土器を破砕して埋置したものも數多く知られているが、本古墳の場合その様な土器破砕という行為の代りに土器をふせた状態で埋置しており、それがどのような思想的、宗教的背景をもつものなのかは不明である。しかし、この事は古墳時代の埋葬祭祀の一環をうかがわせるものであろう。また主体部の南西側に径約2m前後の焼土の広がりが見られ、これは旧表土面が焼かれている事から、おそらく古墳築造前か埋葬時に焼かれたものと思われる。古墳築造前に焼く行為は数例見られ、伐採物の処理という理由の他に、土地の邪靈を追い払うなどの宗教的意味があるのでないかと考えられている。埋葬過程において火を焚くという行為が行われたとすれば、それはやはり葬送儀礼に係わるものであり、「祭祀」の内容を物語るものとして興味深いものといえる。本古墳の場合、焼土の範囲から考えて後者の可能性が指摘できるのではないかと思われる。このように「火」を使用した埋葬祭祀の痕跡をもつ例は桂見土壤墓群などに見ることができる。^{註10}

次に出土遺物を手懸かりに古墳築造年代について考えてみたい。

主体部上から出土した高環形器合は環部、脚裾部とともに段をもつ特殊な形態のもので、県内においては類例を見ないものであり、在地型土器ではなく他地域の影響を受けたものの可能性の方が高いものと思われる。県外で環部、脚裾部とともに有段であることだけに着目して例を探すならば、北陸系の月影式や畿内第五様式などに認められる。しかしながらこれらは弥生時代後期～終末期の土器である事から本古墳のものがそれらと同時期のものとは考えられない。月影式や畿内第五様式より一段階、二段階新しい時期において、これらのものが本古墳のものに影響を与えたものなのかそうでないのか、現時点ではそれを明らかにする資料が無いので今後の類例を持ち、また北陸、畿内以外の他地域との関係も考慮しながら検討する必要があろう。^{註16 註17}

高環は2個体ある。その内の1つには環部内面に暗文状のヘラ磨きが施されており、古墳から出土する高環で暗文の施されたものは県内ではあまり例を見ないものである。残存部分が少ない為に形態を把握することはできないが、環底部の形態が平らに近く、断面も厚いことから見て八雲村の増福寺古墳群や安来市の大坪古墳群出土の高環と比較的類似しており、時期的に近いものと思われる。^{註18 註19}

管玉は細長いタイプのもので、前期古墳から出土する太くて短いものとは様相を異にする。また後期古墳においては見られないものである。この様な細長いタイプの管玉を出土した例は松江市客山古墳、篠川郡田枝村口田儀経塚山古墳などが知られている。本古墳出土の管玉は客山古墳のものよりやや古いものとする指摘もあるが、それもごく少ない時期差であったものと思われる。^{註20 註21 註22}

勾玉についても管玉と同様に、赤瑪瑙製のものが前期古墳から出土する例は県内では認められず中期以降に見る事ができる。また作りも丁寧である事から見て後期の所産とも考えられないものである。

刀子については最近三宅博士氏が、古墳時代の刀子を須恵器出現以前のものをⅠ期、それ以降をⅡ期とする編年を発表され、それによると本古墳出土の刀子は、若干の差異は認められるものの、三宅氏のⅠ期の特徴と類似しているように思われる。^{註23}

以上のように出土遺物の年代観について簡単に触れたが、年代決定の重要な指標となる土器の時期が不明瞭であるために、実年代を決定することは不可能であった。他の遺物の年代観から考え、とくに本古墳の管玉が客山古墳のものより古いとすることからある程度の時期をおさえることが出来ると思われるが、ここでは一応大きな幅でとらえて古墳時代中期頃と考えておきたい。

註

- 註1 同崎雄二郎、中尾秀信「松江・宍山古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第7集』島根県教育委員会 1981年3月
- 註2 鹿島町教育委員会「奥才古墳群」 1985年3月
- 註3 島根県教育委員会「造山第三号墳調査報告」 1967年3月
- 註4 出雲市教育委員会「山地古墳発掘調査報告書」 1986年3月
- 註5 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」 1984年3月
- 註6 松江市教育委員会「中竹矢後1号墳・長峰遺跡」 1986年3月
- 註7 註2と同じ
- 註8 山本清「山陰の土師器」「山陰古墳文化の研究」 1971年3月
- 註9 近藤正・東森市良、内田才「島根県安来平野における土壤窯」「上代文化第36輯」 1966年
- 註10 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団「桂見墳墓群」 1984年
- 註11 註1と同じ。
- 註12 島根県教育委員会「大坪古墳群」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1」
- 註13 石野博信「四・五世紀の祭祀形態と王権の伸張」「古墳文化出現期の研究」 1985年3月 学生社。
- 註14 都出比呂志「墳墓」「岩波講座日本考古学4・集落と祭祀」 1986年2月 岩波書店
- 註15 註10と同じ。
- 註16 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」石川考古学研究会 1983年
- 註17 石野博信「古式土師器」「古墳文化出現期の研究」 1985年3月 学生社
奈良県立橿原考古学研究所編「六条山遺跡」 1980年3月
- 註18 八雲村教育委員会「増福寺古墳群発掘調査報告書」 1981年3月
- 註19 註12と同じ。
- 註20 註1と同じ。
- 註21 山本清「小規模古墳について」「山陰古墳文化の研究」 1971年
- 註22 山本清先生御教示による。
- 註23 三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書」「山陰考古学の諸問題」 1986年

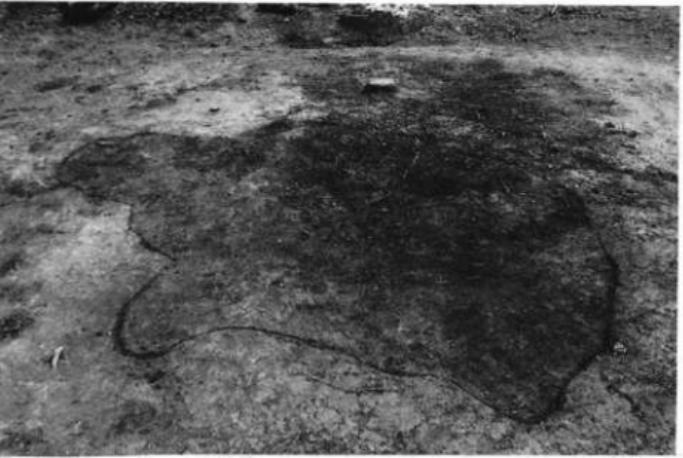




表土除去後の墳丘



集石遺構

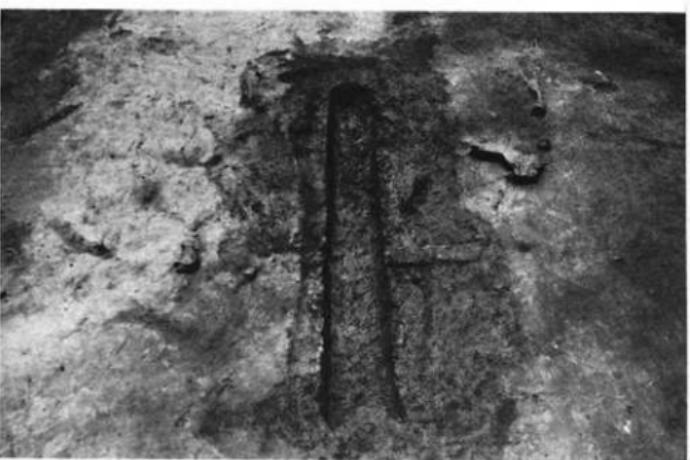


墳丘基盤の焼土

土師器出土状況



主体部の木棺痕跡部分
(北から見る)



主体部内
管玉出土状況





主体部完掘状況
(北から見る)



1号墳全景
(北から見る)



1号墳調査後全景
(北から見る)





細曾 1 号 填

昭和 62 年 3 月 発行

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社谷口印刷

松江市母衣町 89